

曹洞俳壇

選・村松五灰子

ひぐらしや中有流離ちゅうりゅうりのひとつならむ

千葉県 鈴木 英子

評 ひたすらに鳴く。それを死んでから次の生を受けるまでのさまよえる魂と見る。まことに有情の心は深い。

万緑を諸手の水すいに掬すくひをり

神奈川県 小野沢邦彦

評 凝縮された森の緑を映す泉の水面。両の手で豪快に掬う様は、すがしい。表現の巧みさも見られる。

◆口含む朝の水より秋に入る

北海道 中西 千晶

◆街をゆく身仕舞の良き浴衣の娘

埼玉県 日尾野安子

◆手際よく盆提灯を組み立てる

埼玉県 新井 勲

◆子育てに細りゆく娘の大暑かな

東京都 長谷川 瞳

◆牛蛙深夜の調べクレイム

神奈川県 小澤美奈子

◆終戦忌七十年を戦無く

ロサンゼルス 井上 健一

◆かもめーる金魚模様のと二枚

大阪府 西羅 梢

◆短日や一字一仏写し了へ

北海道 堺 隆

◆夕刻の値下げ札待つ秋隣

青森県 中田 瑞穂

◆廃仏の跡の無残や木下闇

岐阜県 大下 雅子

*選者吟

一杯の酒が露けき身を支ふ

五灰子

*作句小見

今回はお若い方が多かったことも頼もしいことでした。

これからも応募続けてください。次は入選かも。継続は力です。

曹洞歌壇

選・長澤 ちづ

黒き波知るや知らずや礁の鵜はばつねんと
して沖をみつめる
宮城県 鎌田登喜子

評 六年前の東日本大震災の津波の黒い濁流は被災者ならずとも映像で見ても忘れられない。「黒き波」はその波のことと
思う。たくさんの尊い命を奪った津波を、あの礁の鵜は知っているのかと問うことで裡に抱く鎮魂の念が表されている。

鈍空に射したる光 一条の希望のごとく街を
照らせり
熊本県 島田 佳可

評 熊本地震から一年半が経とうとしている。この一首で詠
われる「虹」も単なる雨上りの自然現象ではなく、復興への
希望が託されている虹なのだろう。

◆二百人働く人の居しといふ番屋の広間つらぬく棟木
岐阜県 後藤 進
◆児の靴にもたれて蟬の絶えてをり盆の朝のあがりがまち
島根県 門脇 順子

◆母眠る山墓までの道すがらつんつんくるくる彼岸花咲く
福島県 大槻 弘

◆風鈴屋涼しき風を連れもして路地から路地へ音を売りゆ
く
秋田県 小田篤恭
◆初物の白桃冷やし皮のまま喰らへば幼に戻りし気分
島根県 横山 葉吾

◆青白き魂乗せてゆく夏の夕に飛び交う精霊とんぼ
長崎県 小玉愛美理

◆麻痺の夫が片手に書きしボードの字ぐにやぐにやなれど
ふと通じたり
山口県 濱田 道子

◆雑草の土竜たたきのごとく生う「こにしき草」とて思わ
ず笑う
静岡県 末光 愛正

◆よろけ歩く吾をよけつつ若人のハイブリッド車目礼しゆ
く
大阪府 高畑 良圓
◆母のこえ闇よりきこえ目覚むればかすかに冷ゆる汗握り
ぬぬ
北海道 氣田 静子

*選者詠

南蛮船に象の揺られてやってきた未知なる
ものの象徴として
ちづ

*作歌小見

大槻さんの「つんつんくるくる」は彼岸花の咲く様子を表
す言葉ですが、それ以上に少年に返った母恋の心情が託され
ています。横山さんも幼児に返ったように美味しそうに白桃
を食べていて痛快。どちらも素の作者が窺え味わい深いです。



大本山永平寺



抱かれて

霜月をむかえ、永平寺を抱く山々は、いよいよ涼しい風を知らせてくれます。

「心なき草木も秋は凋しぼなり 目に見たる人愁ひさらめや」(『傘道詠』)

道元禅師さまのお歌です。輝く紅葉も、ひらめく落ち葉も、素直にみれば、みな活き活きとした無常の仏の営みそのものです。そこに我が身を引きあてますと、この身は有難く、また自らも等しく仏の胸に抱かれていることに気づきます。

さて、寛喜元(一二二九)年十一月を過ぎ、涼しい風の吹くころです。

中国から帰国した道元禅師さまは、建仁寺に身を寄せていました。そこに、後に永平二祖となる懷辨えんべん禅師さまが参られます。お二人は初めて相見し、問答をなされます。その時の問答の内容は、後に『弁道話』として記述されたともいわれます。

道元禅師さまは、そのお示しの中で、「坐禅修行は、たとえ一人一時のものであっても、欠けることも余ることもない仏さまと等しい坐禅である。」(私訳)とお示しです。

今年も、九十日間の冬の修行期間に入ります。雲水の第一座となる首座しゆざがあたり、いよいよ坐禅にいそむ冬安居あんごが始まるのです。

朝や夕べに、一時でも静かに坐り、永平寺の雲水たちも、皆さまも、処は違えど、等しく仏の胸に抱かれていることを確かめたものであります。



大本山總持寺



鶴見大学附属中学校・高等学校吹奏楽部によるステージ演奏

御移転記念行持

十一月五日は、明治四十四（一九一）年に總持寺が能登から横浜鶴見の地に移転し、遷祖式せんそしきが盛大に行われた日です。

總持寺ではこのことにちなみ、毎年十一月一日から五日まで様々な御移転記念行持を行っております。

その内容は、記念法要をはじめとして、檀信徒の集い・万灯供養・稚児行列・大茶会・華道展、そして境内を開放しての「つるみ夢ひろばin總持寺」など多岐にわたります。特に三日の文化の日に行われる「つるみ夢ひろばin總持寺」は鶴見を代表するイベントとして定着し、何万人もの来場者で賑わいます。

ただし、御移転記念というと何かお祝い一色のような印象がありますが、夢ひろばの場合は御移転大事業を成し遂げた石川素童いしかわそどう禅師や先人たちの血のにじむような御労苦に想いを馳せることも忘れてはなりません。再来年には、その石川素童禅師の百回御遠忌ごおんが巡って参ります。百回御遠忌の法要は御移転記念行持に、十一月三日から五日まで行う予定です。

記念式典が終わると、十三日から冬安居制中とうあんごせいちゅう「五則ごそく」という特別行持が行われます。そのクライマックスが十七日の首座法戦式しゆざほっせんしきです。これが終わると、いよいよ翌月の臘八摂心ろうはちせつしんを迎える準備となり、修行僧たちの顔つきも一段と引き締まってまいります。